

1、アフリカの美術を展示する——仮面と神像から都市の活気へ

「アフリカ芸術展」——1961年、日本

日本で初めて本格的にアフリカの美術を紹介した展覧会は、1961年の「アフリカ芸術展」です。イスラエルのコレクターがほぼアフリカ大陸全土から集めた、伝統的な木彫の仮面や神像など約160点が、東京や大阪など全国5か所のデパート催事場を巡回しています。ピカソなどヨーロッパの芸術家に影響を与えた「魔術的な造形とダイナミックな野性美」への関心は強かったようで、当時の美術雑誌も大きく取り上げました。ちょうどアフリカ諸国の独立の頃ですが、そうした同時代の情勢はあまり話題になっていないようです。

「大地の魔術師たち」展——1989年、フランス

伝統的なものはさておき、アフリカで生み出される同時代の美術に対しては、ヨーロッパですら、ほとんど注目する人がいませんでした。変化が起きるのは1989年、パリで開かれた「大地の魔術師たち」展がきっかけです。これは「世界中」、つまり美術の本場とされる欧米以外の国や地域も含めて、「世界中から100人のすぐれた現代美術家の作品を集めて平等に見せる」企画でした。アフリカからは17人が選ばれました。しかし、全員が街なかで派手な看板や棺桶などをつくる職人であり、美術の専門教育を受けた作家が一人もいなかったため、アフリカ出身の美術関係者からは疑問や批判が多く出ました。当事者の意見を聞かず、欧米人の目から見て珍しいものだけを選び、エキゾチックさを強調したのではないか、ということ。ともあれ、この展覧会以後、アフリカで活動する現代の作家たちへの関心は、爆発的に広がりました。

「インサイド・ストーリー：同時代のアフリカ美術」展——1995年、日本

当館では1995年、「インサイド・ストーリー：同時代のアフリカ美術」展を開催しました。これはアフリカの20世紀美術の歩みをたどる日本初の試みで、徳島や福島など全国6か所の公立美術館を巡回しました。こうした展覧会が実現した背景には、当館の学芸員であった川口幸也氏（のち国立民族学博物館准教授を経て現・立教大学教授）が1989年にガーナの作家サカ・アクエの小さな個展を担当し、翌1990年から91年には赤道アフリカ8か国を訪れて、作家たちとの交流を始めたことがあります。

このセクションで展示している写真は、1990年から95年にかけて川口氏が撮影したものです。喧噪と活気に満ちたアフリカの諸都市は、多彩で魅力的な造形が生み出される源泉のひとつとして、一学芸員を魅了しました。その活気を伝えるべく、「インサイド・ストーリー」展では、これらの写真や街なかの看板やマネキンなどが、現代美術の作品とともに展示されました。

2、1990年代のアフリカ現代美術

当館が収蔵するアフリカの現代美術作品は、おもに西アフリカ出身の作家によって1990年代に制作されたものです。これらの作家や作品は、どのようないきさつで登場してきたのでしょうか。

「ネグリチュード」——黒人であることの誇り

第二次世界大戦後に独立をめざす機運が高まるなかで、多くのアフリカ諸国では、新たな「アフリカらしさ」をどのように打ち出していくかが課題となりました。その際、主にフランス語圏の国々で手がかりになったのが「ネグリチュード」です。これは1930年代のパリで生まれた言葉でした。フランス領だったカリブ海のマルチニーク出身の詩人エメ・セゼールや、のちにセネガルの初代大統領となるレオポルド・セダール・サンゴールなど、当時のエリート黒人学生が意気投合し、人種差別に対して、黒人であることの誇りを取り戻す文学運動を展開していました。

フランス語圏西アフリカ——セネガル、コートジボワールの場合

1960年代のセネガルでは、大統領となったサンゴールのもとで「エコール・ド・ダカール」とよばれる一派が国立美術学校から登場します。アフリカの神話や伝説、自然や風俗をキュビズムふうに表示する絵画が奨励されましたが、70年代半ばにはそうした政府主導の運動への疑問が生まれます。ストリート・パフォーマンスやハプニングなど、芸術ジャンルの境界をまたぐような活動を地域で行う集団「ラボラトワール・アジタール」が結成されました。**イッサ・サンブ**はその代表のひとりです。より若い世代の**ムスタファ・ディメ**は、自身が親しんできた木という素材にこだわり抜くことで、静かにアイデンティティを探索しました。

コートジボワールでも、70年代半ばには国立美術学校の学生たちが、廃品などを使って表現する「ヴォウヴォウ」という動きを起こしています。その余波を受けつつ、ストリートに出て若者のエネルギーを吸収しながら制作したのが**アナパ**です。

英語圏西アフリカ——ナイジェリアの場合

英語圏の国にも、「ネグリチュード」の考えは少なからず及んでいるといえます。ナイジェリアでは、ウリという伝統的な泥絵をヒントに、新しい表現を模索する作家ウチェ・オケケが1960年代に登場し、70年代からはナイジェリア大学で次世代にウリの造形を伝えていきます。この大学に、ガーナから1975年に赴任してきたのが、**エル・アナツイ**でした。いまや西アフリカを代表する作家となった彼もまた、ガーナの伝統的な織物や染め物を再発見しながら、90年代以降は叙事詩のような壮大さでアフリカ人の生きる状況を表現しています。

ロンドンを拠点に活動する**ソカリ・ダグラス・キャンブ**は、自身が属するカラバリ社会では女性に禁じられている金属彫刻の技術を獲得した女性作家です。伝統的な祭礼の様子をダイナミックに表現するほか、90年代後半からは故郷を襲う深刻な環境汚染に触発された作品も発表し、社会的な反響を呼んでいます。